ミ 北斗だより

令和６年度　第６号
（９月２日発行）
愛媛県立今治北高等学校

夏の甲子園を見て感じたこと

生徒課長　　重澤　和史

この猛暑の中で開催された全国高等学校野球選手権大会は、京都国際高校の初優勝で幕を閉じた。低反発バットになった影響もあるが、新チーム発足から公式戦本塁打０で、最後まで守り抜いた優勝だったようである。特に、関東第一高校との決勝戦では、９回裏と 10 回裏タイブレークでの二死満塁の大ピンチを耐えての優勝は、実に見ごたえがあった。

優勝後のインタビューで、小牧監督は「精神力、気持ちの部分、ここだけは負けたらアカンということをずっと言い続けた」と話し、藤本主将は「僕らは間違いなく日本一キツい練習と生活をしてきた」と、胸を張っていたのが印象的だった。

数年前から、京都国際高校が躍進してきている状況をよく耳にしていた。やはり、厳しい修練を乗り越えて栄光をつかんだようである。昨今の私立高校の台頭とは裏腹に、練習環境は決して恵まれておらず、右翼 60m、左翼 70mと、本校よりも狭いグラウンドで、全体での実戦練習はできないらしい。監督の下で高校野球を志す選手が、厳しい規律の寮で生活をし、日々寝食を共にしている。寮生活では、自室の整理整頓はもちろん、玄関の靴の並べ方にも細心の注意が払われているようだ。生活で粗相をした選手には草むしりやごみ拾いなどのペナルティーもあり、心身ともに鍛えられている。日頃の寮生活での時間厳守はもちろんのこと、甲子園大会中も指定宿舎からは外出禁止だったそうだ。管理ならぬ「監視」とも言えるが、私が感心したのは、選手たちが窮屈に感じておらず、それを強みにしていることである。優勝後の選手インタビューでは、「生活管理は当たり前のことであり、これが普通なんで何とも思わない。厳しいからこそメンタルが鍛えられ、選手同士の絆が深まるし、タイブレークになっても誰も気持ちが引かない。何より試合で結果が出ている。」と言ってのけた。また、宮本部長は小牧監督の指導意図について、「当たり前のことを当たり前にできないといけないし、基盤というところを監督は大事にしている。基盤がないと上積みもできない。いくら技術が達者でも基盤ができないとそれで崩れていくという考え方。そこは重きを持って指導されていると思います。」と説明された。

日本一が決まったその夜、30 年近くお世話になっている、京都府高野連理事長である米川勲先生にお祝いの電話をさせていただいた。「突出した選手がいないにもかかわらず、投手中心に守り抜き、我々も勉強させていただきました。」とお伝えすると、米川先生から、次のような内容を伝えていただいた。「おっしゃる通り、プレーヤーとして選手はおりませんでした。ただ、端から見ていて、すごい記録員とすごいボールパーソン・荷物運搬員のいるチームでした。優勝が決まった瞬間、大粒の涙を流し、泣きながら抱き合っていたのは、背番号をつけていない３年生の補助員たちでした。韓国にルーツを持つ学校で、校歌も韓国語であることから、ヘイト発言をする心無い大人がいることは残念ですが、その遥か上を突き進む高校生の集団でした。」という内容であった。テレビ等の映像では見ることのできないチームの本質をお聞きし、電話先で胸が熱くなった。よく、「控え選手を見ると、そのチームの本質が分かる」という。今回の京都国際高校の日本一に共感を覚え、勝つべくして勝ったのだと確信した次第である。

※お気付きの点や、御意見･御質問などありましたら、下に記入の上、お子さんを通じて担任まで御提出ください。

今治北高校の日々の様子をホームページに掲載しています。「今北日記」「生徒の活動」「部活動」など、ぜひ御覧ください。

今治北高等学校　学校公式サイト　https://imabarikita-h.esnet.ed.jp

- 切　り　取　り -

＿＿年　＿＿組　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿